

アジアを攻める!

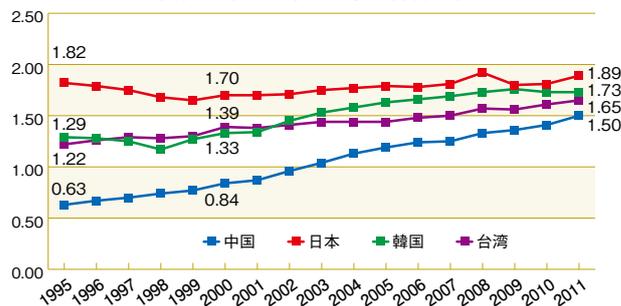
中国や東南アジア地域における最新の経済情勢やビジネス動向を、福井県立大学地域経済研究所の専門家に解説していただきます。

1 中国の「ものづくり」の実力



中山のキャノン

機械産業の競争力：中日韓台比較



執筆者 丸屋 豊二郎氏

1951年生まれ。特殊法人 アジア経済研究所、独立行政法人 日本貿易振興機構アジア経済研究所を経て、現在、福井県立大学地域経済研究所 教授。中国・アジア経済、産業集積、アジア国際分業を専門に、産業集積のイノベーションや中国を核とするアジア国際分業などに関する研究、日本企業のアジア展開支援に資する政策研究を行っている。

調査をもとに、産業集積を形成する外資系・中国系部品メーカーの勢力図をまとめてみた。それによると、まず中国では部品は機能、技術の両面から3つに分類される。

A…「安全」に関わる基幹部品

B…技術水準がある程度高い部品

C…耐久性が短い交換すれば使えるような部品

これら3種類の部品シェアは、自動車の場合で、それぞれ30%、20%、50%程度を占める。競争力の視点で捉えると、Aは日系企業が圧倒的に強く、Bは日系、台湾系、韓国系、それに中国系を含めて競争が激しくなる分野、Cは中国企業に太刀打ちできない分野に分けられる。つまり、進出日系企業がこれから中国で生き残れる分野は「AまたはBに属する企業」と、高技術を擁する「素材企業」と「すり合せ技術」を持った企業であるというのが大方の見方である。

しかし、高品質製品の分野で日本企業は圧倒的な競争力を持つといっても、中国のものづくりでは必ずしもすべての製品が完璧な品質を求められるとは限らない。「ローカル化」と呼ばれる現地の需要に見合った製品レベルが求められているのも忘れてはならない。

(注) RCA指数Ⅱ(当該国の機械産業の輸出シェア)÷(世界の機械産業の輸出シェア)

中

国の経済発展には目を見張るものがある。改革開放から今日までの33年間、中国は年平均10%のGDP成長率を記録し、2012年には1人あたりのGDPは6400ドルに達した。その結果、中国はGDP規模では世界第二位、輸出(貿易)、対内直接投資、外貨準備額では世界のトップに躍り出た。これらの指標から分かるように、中国は世界の企業を誘致し、中国で製造した製品を世界各国に輸出し、国富を蓄えてきた。このため、中国のものづくりは著しい発展を見せている。そこで中国のものづくりの実力について考えてみたい。

まず、中国のものづくりの実力を競争力の観点から見てみよう。中国機械産業の国際競争力はどの程度なのかを、「RCA指数(顕示された比較優位指数)」を用いて日本、韓国、台湾と比較して見た。RCA指数は1を超えた場合にはその国の機械産業は比較優位(競争力)があるとみなし、1を下回った場合には比較優位(競争力)がないものと判断する。図を見ると、中国の指数は1995年以降右肩上がりであり、2003年に競争力を有する境界線である1を超え、2011年には1.50まで上昇している。つまり中国の機械産業は2003年になって国際競争力を持ち始め、その後

も競争力を強化し、今日では日本、韓国、台湾に迫っている。中でも「一般機械」や「電機機械」では、中国は既に日本、韓国、台湾を凌駕している。しかし、中国のものづくりの現場を見ると、その担い手は日系、欧米系、韓国系、台湾系などの外資系企業である。それを象徴するのが、広東省の外資を中心とした電機・電子、自動車などの一大産業集積である。珠江デルタ地域には、キャノン、トヨタなど外資系部品メーカーも多数進出している。ものづくりの実力はすそ野の広い部品メーカーの存在にかかっている。そこで広東省での日系部品メーカーの実態